

シーニックバイウエイの今、
そして未来を語ろう
ひろがる・つながるシーニックバイウエイ
北海道（深化）



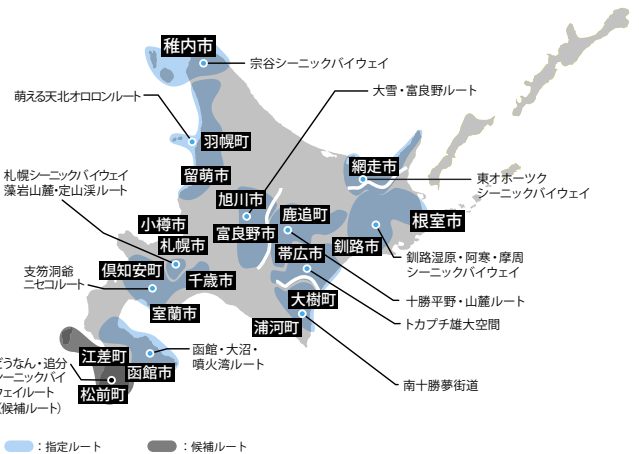
シーニックバイウエイ全道フォーラム2012

シーニックバイウエイ北海道推進協議会
国土交通省北海道開発局建設部道路計画課・
開発監理部開発調整課

シーニックバイウエイ北海道推進協議会の主催する「シーニックバイウエイ北海道全道フォーラム」は、多くの方々との出会いで、地域や北海道がさらに活性化することを期待し毎年開催しています。本年度は、2012年12月1日、札幌コンベンションセンターで開催、全道各ルートの活動団体や関係機関、企業、一般市民の方々など約250名が参加しました。

第1部では、ベスト・シーニックバイウエイズ・プロジェクト2011の紹介、第2部では、シーニック・セッションとして活動紹介とテーブル・セッションとしてルート団体間、参加者との交流を、第3部ではトーク・セッション、また第2部の後に民間企業等との連携に関する包括連携協定調印式を行いました。

シーニックバイウエイ北海道は、試行期間も含めると今年で10年目を迎えます。第3部では、シーニックの立ち上げに関わった石田東生氏（筑波大学教授）、原文宏氏（シーニックバイウエイ支援センター業務執行理事）、和泉晶裕氏（北海道開発局道路計画課長）の三者による、「キングギドラ対談」と題したトーク・セッションを行いましたので、その概要を紹介します。



シーニックバイウエイ北海道は、地域に暮らす人が主体となり、企業や行政と手をつなぎ、個性的で活力ある地域づくり、景観づくり、魅力ある観光空間づくりを目指す取り組みです。2005年よりスタート、12年12月現在、11の指定ルート、1つの候補ルートがあり、約350団体が活動しています。

第3部 トーク・セッション

キングギドラ対談

橋本 スクリーンに映っている絵、これはまちを愛する怪獣「シーニックバイウエイ」10歳が、老かいなキングギドラに襲われているように見えますが、意外と楽しく会話をしている、笑っているようにも見えて、井戸端会議でもしているようでもあります。このキングギドラ、敵か味方か。きっと味方なのでしょう。今日は、キングギドラのお三方にこれからのシーニックバイウエイについてお聞きしたいと思います。

シーニックバイウエイ北海道は、2001年に国土交通省北海道局の重点施策になったのが制度検討の始まりです。その後、ガソリン国会などがあり道路行政の予算の仕組みが変わるなどの環境の変化や、各ルート団体の活動内容も多様化していますが、05年に制度整備をして以来、基本方針や目標、枠組み等は堅持され現在に至っています。

今日は、制度設計に携わった3人に、当時の想いも重ね合わせつつ、「何を壊す」「何を守る」「何を創る」をキーワードに、今後のシーニックバイウエイ北海道について、未来志向で大胆に議論していただきます。

これまでの10年を振り返っての想い

橋本 制度創設当時の2006年に出版された「シーニックバイウエイ北海道“みち”からはじまる地域自立」に皆さんがお書きになったものの中から印象的な言葉をご紹介させていただき、10年を迎えての感想等をお聞きしたいと思います。

石田先生は、2003年にシーニックバイウエイ制度導入モデルルート検討委員会を設立したときに、「聞いた瞬間にこれはいいと思いました。うまくいく。全国的にも広がるだろう。シーニックバイウエイでは地域の活動団体の方たちとすごくいい関係が築けそう。行政とコミュニティの新しい関係、総合化のあり方と

か」と、語っておられますが、今、振り返っていかがでしょう。



コーディネーター
橋本 幸氏
北海道開発局道路計画課道路企画官



石田 東生氏
筑波大学教授

石田 この10年あつという間に過ぎましたし、楽しく過ごせて、いろいろな場所に友達もできて、私の人生は豊かになりました。たぶん皆さんも同じように人生が豊かになっているのではないかと思います。

キングギドラは小学生のころ映画を見た記憶がありますが、悪役ですよ。地球生まれのゴジラとかモスラに倒される方です。私たちはもう少し心優しいと思っています。そこだけ文句があります（笑）。

橋本 大変失礼いたしました。原さんは、シーニックバイウエイ支援センターを設立したときに「日本に導入するならば、必然的に運動の中心となる場所が必要になる、という認識は早くからありました。統一したマニュアルや仕組みをステレオタイプでおろすのでは制度として機能しないだろう。そのため地域で全てオーダーメイドの対応をすることにしたのです」と語っていますが、いかがでしょう。

原 やっぱりそうだったなと思いますし、今でもたぶん間違っていないかと思っています。多様な価値観をお持ちの方々が各地域で活動すると、それに対する支援の形も全部違うと思いますし、支援というよりも一緒にやってきたという方が正しい表現だと思います。いろいろな課題を一つずつ10年かけて一緒に



原 文宏氏
(一社)シーニックバイウエイ支援センター業務執行理事

やってきていますが、いつまでたっても課題はなくなりません。キングギドラはいつも攻めている感じがしますが、自分は10年間攻められ続けている感じがしていて、その点は違うかなという気がします（笑）。

橋本 和泉さんは、政策提案をしたときは北海道局地政課の専門官でしたが、「地域の景観をよくすること

は、そのまま地域振興につながる。シーニックは新しい価値の創造です。地域が活性化されれば、おのずから道路は活用される。道路は黒子でいいのです」と言われていますが、いかがでしょうか。



和泉 晶裕 氏
北海道開発局道路計画課長

和泉 今でも気持ちは変わっていませんし、方法が多様化していると思っています。

最初にシーニックにかかわったのは、2001年に国土交通省になった年の8月に重点施策を提案する時です。そのときに検討した内容は、道路施設の改善、看板・広告類の対策、

道路占用物、沿道建物への対策、民間活力の活用、NPOの支援、景観マニュアルの作成などです。内容が道路と景観にシフトしていて、今とはずいぶんかけ離れていますが、アメリカ視察に行く前にHPからの情報で考えた北海道版シーニックバイウェイでした。

実はそのとき、「シーニックバイウェイ」という横文字が本省内で懸案となり、当時の上司に日本語にと言われて考えたのが「北の旅景色プログラム」でした。結局、あまり良くないということで「シーニックバイウェイ（仮称）」でスタートしました。その後、アメリカで地域主体、行政が黒子になる等を学んで大きくかじが切られるというのが10年前の出来事でした。

橋本 そう言われてみると当時の資料は、色彩も10年前の感じがしますよね。

ここから「何を守るか」をテーマに順番にお話しただきたいと思います。

何を守る!?

石田 シーニックは風景、景色です。景色を守るの意味は何かというと、人々の暮らし、元気、気持ち、まちの活発さ、産業、きれいな森、水などが景色を構成しています。それをぜひ守りたい。そのシンボルが景色だとずっと申し上げてきましたし、今でもその信念は変わりません。

また、美しく元気な日本とそれを構成するさまざま

なふるさとや田舎の本当の意味を問い直すことが重要だと思っています。アジアの人々は、本当に良い日本の田舎を求めているのではないかと思います。美しくするには、人々の元気や活気、愛着などの誇りが土台になりますので、そのためには人とのつながり、ビジネスで活動を支える体制が必要かなと思いました。

和泉 アメリカリソースセンターのハンカ氏が一番大切にしていることは、「Are you having fun?」だと言っていました。どうやって楽しく続けていくかが、一番大切で一番守りたいことです。

次に、モデルルート時代からずっと言っていますが、とにかく人と会って、話をして、食べて、飲むという機会をもっともっとつくっていききたい。そうすることでお互いの意見の違いも理解できるようになるので、強化したいと思っています。

また、引き続き行政が参加できる環境づくり、機会は均等に、しかし、手を挙げた人とは一生懸命にやるというシステム、そして、全国的に見てもルートコーディネーターがいる地域はうまくいっているので、支援する組織が必要だと思います。

最後に、やはり北海道開発局の人材、技術があったからうまくいったのではないかと自負しています。引き続き、役所の人材を育てていかなければならないと実感しているところです。

原 なぜ企画段階から参加したのかということ、北海道が自立し、なおかつ、うらやましいと思われるようになってほしいという、北海道への愛着、想いがあったからです。

当初は、地域の方々からの提案、要望はとにかく一度持ち帰ってトライして、その結果を持って話しに行こう、ノーと言わないことを一つのルールにしました。そういう気持ちは、今後も変えないで守っていききたいと思います。

また、いろいろご批判もあると思いますが、10年間みんなでやってきたことの重みはとても貴重で、自分自身も宝物のように思っています。できれば、50年、

100年続いて、シーニックバイウェイが一つの文化になっていくことを夢見ていますので、今までの歴史は大事にしていきたいと思っています。

最後に、シーニックはいろいろな行政界をまたいだ活動なので、それに対する中間支援機能を持った組織が大事です。現在は、支援センターやルートコーディネーターがやっていますが、そういった人たちが食べていけるということも今後は非常に重要なところでです。こういう広域な中間支援的な機能と人を守りたいと思っています。

橋本 なにか付け加えたいことはございますか。

石田 重要なことを言い忘れていました。やはり一番守りたいのはシーニックバイウェイそのものです。その中心にあるのが、皆さんの思い、志、それを支える人たちを本当に守りたい。日本の財産になっていくと思いますし、地域の発展戦略としても非常に重要だという想いを強く感じました。

それともう一つ、当初は道路として何ができるかを議論していましたが、その考えでは駄目だというのが最大の成果だと思っています。その精神がシーニックにつながって今日に至っているのです、一番の根本をぜひ守りたいと思っています。

原 シーニックにはこれまでの仕事と利害関係のない方がたくさんいて、ある意味新鮮なのですが、言われることも辛らつでした。言われた後は切ないものもありましたが、自分自身のシーニックに対する意識は高まったし、少しは育ったのではないかとと思っています。

和泉 石田先生からの「道路の枠を超えたことがブレイクするタイミングだった」というのと、原さんから「これまでとは違うジャンルの方が入ってきた」ということが、モデルルート時代にガラッと印象を変えた大きなことでしたね。それが今のような広がりになり、北海道にはこんなに元気な人がたくさんいることも分かりました。

原 いろいろな調査事業もこの一環でお手伝いさせてもらいましたが、一番困るのは終わったときに担当者から「効果は」と言われることです。効果は1年2年でははっきり出ないもので、そういった中でお互いに何とかしながらここまで来たというところに、シーニックの良いところもあるのかなと思います。これからは、今まで以上に効果を問われてくるので、より具体的なアウトプットを目指して努力する必要があると思っています。

橋本 次に、「何を壊すか」ということで、お話しいただきます。

何を壊す!?

和泉 壊すというお題が一番難しかったですね。特に役所の中にいると、なかなか変えられない、変えないということがあるので、変化への恐れ、安住感、形骸化、前例主義のようなものは常に壊していきたいし、毎回考えたいと思っています。

また、推進協議会、行政連絡会議や代表者会議など会議と名のつくものをたくさん作りましたが、本当にこのままでいいのか、もっと良い方法があるのではないかといつも思っています。あるとき、突然破壊行為に至るかもしれませんのでご承知おきくださいという所信表明的なものもありますが、ルートが拡大していくとルートの個性もさまざまになってくるので、安住してしまうと各々のルートに対応できなくなるというのが一つです。

二つ目は、シーニックの10カ条にもありますが、とにかく相手や仲間を批判しないということが一番大切に思っています。そうでなければ、新しい発想も出て



トーク・セッション

こないし、どこに想いがあるのかも分からなくなります。何が想いなのかをお互い理解すると次の話に進むので、批判、排除、縄張りを壊していきたいと思います。

原 基本的に壊すのはあまり好きではないです。社会に必要ななくなったものは時間の中で結果的にはなくなってしまうと思うので、どう社会に残っていくのかということだと思います。あえて壊すという質問だったので書きましたが、比較的ボランティア中心の活動が多いシーニックですが、長期間続けていくには単純にボランティアという形だけでは難しいというのが正直な気持ちです。今回、企業と包括連携を結びましたが、もっと道路そのものを使った道路事業のオープン化等を組み合わせて、ボランティアプラスアルファの事業をシーニックの柱にしていった方がいいのではないかと考えています。

シーニックは他の事業に比べると活動が多様です。全てを取り込めるものではないかと思っていますが、一つの大きな受け皿としてシーニックを使えるようにするためには、道路、農業、河川、福祉、観光だという垣根なしにシーニックというプラットフォーム上で有機的に結びついていくことが重要だと思っていますので、分野の垣根を壊したいと思っています。

最後に、行政連絡会議の連絡会議化は壊したい、ゼビ道や自治体などともうまく連携してやっていきたいと思っています。ルート代表者会議と並行して行政連絡会議がシーニックの両輪としてあるので、ドライビングホースの車輪のもう一つとして、実質的にきちんと動くようになってほしいというのが私の意見です。

石田 私だけが北海道に住んでいないので、その視点から見たときの壊したいものは、無駄な公共事業とか道路とよく言われますが、それは違うでしょうということです。これだけの方が道路をどううまく使おう、

地域を良くしたいと思っているということをもっと発信して、そういう思いこみをぜひ壊したいと思っています。

次に、国の方も来られているのであえて厳しく言いますと、道路は道路敷地の中だけだったのですが、それだけでは地域の想いに応えられない、何もできないと実感したのがモデル検討委員会でした。そのことは非常に大事で、気持ちがあるなら本当に皆さんがハッピーになれるように変えた方がいいと思っています。難しい話ですが、そのためには道路行政の中心にある道路法という古い法律を変えた方が良いと思っています。それは、主に政府やあるいは政治家、ジャーナリストへの注文です。

最後に、シーニックパイウェイの固定観念です。和泉さん、原さんとも同じですが、実は今日、各ルートの方々のご報告を聞いて安心いたしました。自由にいろいろなことにチャレンジされようとしていることが非常に大事だからです。ただ、もう少し皆さんの思いや経験、知識、あるいはビジネスモデルを道外に輸出をする、教えてあげることも考えていただければと思います。シーニックの固定観念は常に壊すと言うことを注意し続けたい限り、なかなか発展していかないと自戒の想いも込めています。

橋本 それでは、創造的に「何を創るか」についてお話しいただきたいと思っています。

何を創る!?

原 シーニックの活動は、若い人たちが入って来やすい、継承しやすい環境をつくらなければと思います。また、何か一つ全道的な取り組みを全体でできないかとも思います。それにはルート運営代表者会議が一つのドライビングホースになっていくと思います。

次に、長く続けていくにはシーニックで直接、間接的に食べていけるような人たちがたくさん出てくるのが重要ですので、幾ばくかでも生活できるようなことができればよいと思っています。シーニックの活動は、最終的には交流人口や雇用を増やすことが目的な



ので、うまく地域づくりと観光と景観が地域の中で循環して、それで生活できる人たちがいるというような環境をつくっていききたい。これは理想、夢の話かもしれませんが、そう思っています。

石田 シーニックには、精神的若者もたくさんおられると思いますが、これからのことを考えると実年齢の若い人をぜひ仲間に入れたいと思います。

また、シーニックバイウェイの活動は思いが相当支えている部分があると思います。大事なことですが、やはり思いだけではしんどいので、それを楽にするような技、観光客の方へのおもてなし、行政のあり方、みんなで支え合う支援のあり方、協働のあり方、そういうものを今後つくっていく必要があるということで「ビジネス」と書かせてもらいました。

最後に、シーニックバイウェイ北海道と各ルートというブランドの確立を目指してほしいです。そこを目指して、皆で頑張っていければなと思っています。

和泉 シーニックバイウェイは、各ルートの活動を含めて全体を説明できる言葉が薄れてきているので、原点に立ち返って北海道の美しい景観の維持、保全のためのプログラムが必要だと思っています。今、開発局では協働型インフラマネジメントという、景観だけではなく、本来道路が持っているなければならない安全性などについて、地域の方と一緒に議論をするような仕組みを来年度から本格的に動かし始めようとしています。できれば全ての開発建設部で取り組みたいと考えています。

そして、常に新しい人を呼んでいるというオープンな体制をどうつくって、そういう人材をどう育てていくか。また、各地域の資源はどういうもので、どれを組み合わせると良いものが出てくるかを皆さんにもぜひ一緒に考えてほしい。次の10年に向けて、知恵を絞って、人を育て、根本の景観を良くしていく取り組みが、

私の今後、新たに作っていききたいことです。

橋本 最後にお三方から10年後のキングギドラ対談へ向けて一言お願いします。

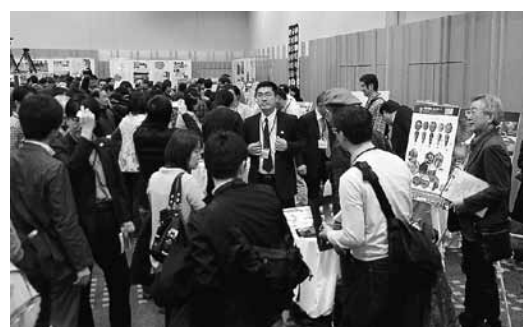
石田 キングギドラは、ヤマタノオロチのイメージがあったと思います。「オロチ」というのは「オノチ」で、「オ」というのはしっぽの「尾」です。「チ」は魔力とか霊力というのが読んだ古事記の中に書いてありました。私の仮説は、「みち」の「ち」は「オロチ」の「チ」と同じではないかということです。霊力や魔力のあるのが道なので、人が往来して、気持ちや情報が通って、お金や物も行き来する。そういう力をどう具体にしていかがが問われています。それは、地域でその道に向かい合って何とか良くしたいという人々の思いからしか出てこない。シーニックはそういう意味で非常に大切で、その思いを形にしていく技と体制をこれからどう整備していくかということで、役所も大学もコンサルも地域も一緒にやっていくことが本当に大事だと思っています。

和泉 キングギドラには首三つでも何人もの方が関わっています。このシーニックも本当に多くの方々に関わってもらえるようになって可能性は無限に近いくらいあると実感しました。もっと可能性を引き出すのに皆さんとこれからも会って、話をして、飲んで食べてというシステム、それだけは必ず守っていききたいと思いました。

原 年齢で引退するというよりは、関わっている中でだんだんと立ち位置や役割が変わってくると思います。そういった中で若い人たちにどんどん入っていただくことになるのだらうと。これからの10年、やはり一生続ける覚悟を持って自分自身はやり続けたいと思っています。できれば、そういう覚悟で共有できる方々とやり続けていきたいというのが私の気持ちです。



シーニック・セッション



テーブル・セッション